

公園における利用者の犯罪不安要因に関する研究

首都大学東京 学生会員 ○吉田 英人

首都大学東京 正会員 小根山裕之

1. 研究の背景・目的

近年、防犯体制の強化がなされているにもかかわらず、犯罪の認知件数・人口あたりの犯罪率は増加の傾向を示している。そういった中で、多くの住民の身近に起こりうる犯罪の一つとして、都市公園内で発生するものがある。都市公園における犯罪は凶悪犯の割合は大きくないものの、粗暴犯・窃盗犯といった誰が被害者となってもおかしくないような種類の犯罪の割合が大きくなっている。さらに、実際に犯罪に遭遇しなくても、利用者がこの種の犯罪に対して不安感を抱くことにより、公園のサービスレベルの低下につながる事が十分に考えられる。このように、利用者の犯罪に対する不安感の軽減は公園の計画・設計の重要な一要素であると言えるが、現在それらが十分に考慮されているとは言い難い。

そこで本研究では、利用者の犯罪に対する不安感を生み出す要因（犯罪不安要因）に着目し、それらと犯罪不安感との関係性を分析することにより、それらを踏まえたより良い公園整備のための基礎的知見を得ることを目的とする。

2. アンケート調査

公園内におけるさまざまな犯罪不安要因と利用者の犯罪不安感との関係性を探るため、アンケート調査を行った。対象地域として多摩 NT 内の 6 地域を選定し、各地域内から近隣公園・街区公園を 1 つずつ選び対象公園に指定した。アンケート調査はポスティング方式にて、2004 年 11 月下旬に実施した。概要を表 1 に示す。

表 1 アンケート調査概要

	愛宕	永山	貝取	豊ヶ丘	鶴牧	唐木田	合計
対象公園 (近隣) (街区)	乞田・貝取ふれあい広場 愛宕第4	永山北 永山第2	貝取南 貝取第7	豊ヶ丘南 豊ヶ丘第6	鶴牧西 まろにえ	李久保	
配布部数	600	600	600	600	300	300	3000
回収率[%]	6.7	11.8	15.3	14.0	19.3	20.7	13.6
アンケート内容	a. 公園の利用について…利用頻度・利用目的・アクセス手段・公園の満足度等 b. 犯罪不安要因について…提示した要因に対する認知・公園全体に対する不安感等 c. 個人属性について…性別・年齢・職業・居住年数・家族構成						

アンケート内容の b. については、既往研究¹⁾から公園内における犯罪不安要因となり得ると考えられた「樹木の量」「見通し」「落書きの数」「死角の数」「利用者の量」に「地域のイメージ」を加えた 6 項目を犯罪不安要因として提示した。その各項目について、対象公園の実態に対する認知と、その認知が不安感・安心感につながっているのか、さらに公園全体についての犯罪に対する不安感の度合いを 10 段階の点数にて調査した。回答者の属性は図 1 のとおりである。

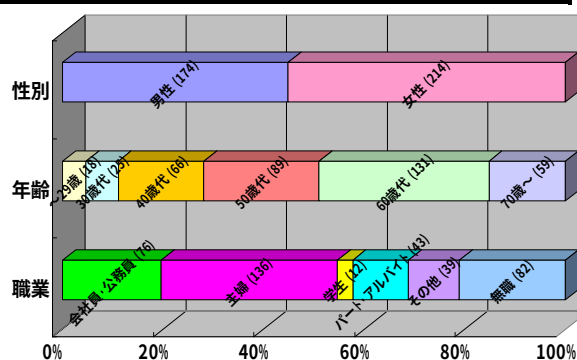


図1 回答者の属性

3. 犯罪不安感の要因分析

アンケートにおいて調査した「各要因に対する認知」・「認知に対応した各要因の不安感」・「公園全体に対する総合不安度」の 3 項目に関して、以下の 2 段階に分けて、公園ごと・公園種別ごと・個人属性ごとに相関分析を行った。

キーワード：公園、犯罪不安、防犯環境設計

連絡先：首都大学東京大学院工学研究科 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 Tel:0426-77-1111(内線 4552)

1. 「認知」⇔「認知に対応した不安感」

2. 「認知に対応した不安感」

⇔「全体に対する総合不安度」

さらに、分析 2.については数量化理論Ⅰ類を用いた分析も行い、総合不安度に寄与している要因を探った。

ここでは、公園種別ごとの結果を右の図 2 および図 3 に示す。分析の結果から、「死角の数」、「見通し」、「樹木の量」の順に犯罪不安感に影響を及ぼしているということが示された。さらに、近隣公園・街区公園に共通して、「落書きの量」と「地域のイメージ」において、分析 1.と 2.の値に大きな差があるという特徴が見られた。まず「落書きの量」については、どの公園においても落書きが多いほど不安にはなるが、公園によってはそれが直接犯罪に対する不安感には結びついていないと解釈することができる。一方「地域のイメージ」については、イメージが悪いからといって不安を感じるとは限らないが、イメージから起こる不安感

は直接公園全体の不安度に影響していると言える。

さらに、回答者の犯罪見聞経験についても調査した結果、経験がある被験者のほうが不安度も高いということが示された。さらに、提示した要素ごとに先に示した分析 1.および 2.を行ったところ、「樹木の量」および「利用者の量」に関する分析 1.の結果に、犯罪見聞経験による差異が見られた。それを示したのが図 4 である。これらの要素はともに、同じ公園の同じ状況を目にしたとしても、個人間による認知の差が大きいと考えられる。そういった要素に対する認知に、過去に犯罪履歴を見聞きしたという経験は大きな影響を及ぼしているということがこの分析から示された。

一方で、経験から来る不安感

4. 結論と今後の課題

アンケート調査および集計・解析結果から、影響の強い要因を示すとともに、犯罪見聞経験と各要素に対する認知や不安感の関係を示すことができた。また、公園内の要素以外に地域のイメージを向上させることが不安感の軽減に有効であるということも示された。さらに、犯罪が発生したという履歴や、犯罪の発生しやすい箇所に関する情報の提供も重要であるということが明らかになった。

しかし一方で今後の課題として、現状の整備も勘案した上での、より踏み込んだ公園整備の方向性を示すことや、「公園内の施設配置」・「敷地の高低差」・「周辺の土地利用」などの本研究で調査することができなかった要因がまだ残っており、それらについては研究の余地がある。

5. 参考文献

- 1) 木梨真知子・金利昭「防犯環境設計における路上犯罪の抑止要因に関する研究」

第 37 回日本都市計画学会学術研究論文集, pp.667-672, 2002

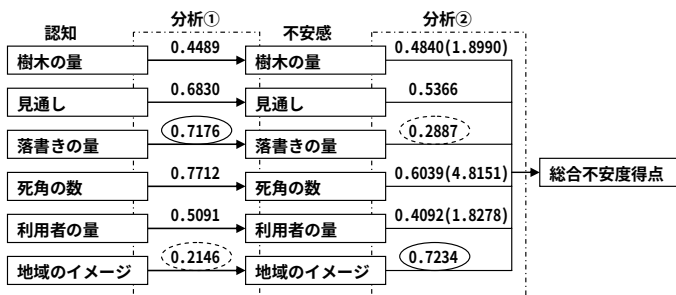


図 2 要因分析の結果（近隣公園）

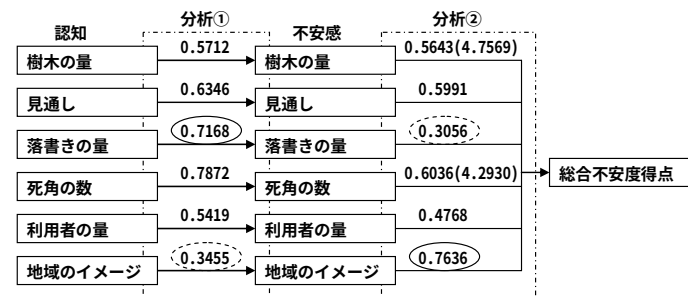


図 3 要因分析の結果（街区公園）

注) 数値は相関係数 () 内は数量化理論Ⅰ類によるレンジ値

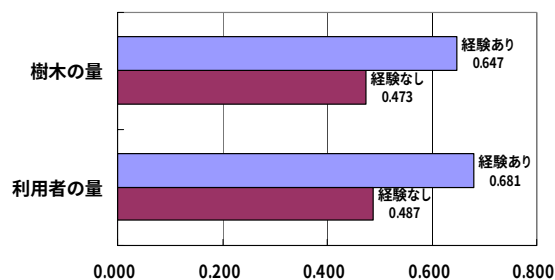


図 4 経験の有無による認知⇔不安感の相関係数の違い